

書評

ジム・マン著『大いなる亀裂—チェイニーとパウエル』

島田 洋一（福井県立大学教授）

以下に取り上げるのは、特に外交政策分野に強く、バランスの取れた叙述に定評のある政治ジャーナリスト、ジェームズ（ジム）・マンの近著である。

題名は『大いなる亀裂—ディック・チェイニー、コリン・パウエルそして時代を特徴づけた友情破綻』（Jim Mann, *The Great Rift: Dick Cheney, Colin Powell, and the Broken Friendship That Defined an Era*, 2020 未邦訳）。内容を分かりやすく表したタイトルと言える。

マンは1984年から87年まで、ロサンゼルス・タイムズの北京支局長を務めた。その経験に基づいて米中関係の問題点にいち早く斬り込んだ『方針転換』（About-face, 1998）、『中国幻想』（China Fantasy, 2007）などの著作は、中国との新冷戦の本質を知る上で、今も重要性を失わない。

本作は、やはりブッシュ長男政権時代の外交安保チームを活写して評判を呼んだ『バルカンの台頭』（Rise of the Vulcans, 2004）の後編、という位置づけになるろう。

ジャマイカ系移民の子としてニューヨーク市に生を受け、陸軍軍人の道に進んだコリン・パウエル（1937年—2021年）を、ブッシュ父政権下、黒人初の統合参謀本部議長に起用したのがディック・チェイニー国防長官（1941—）だった。

1991年の湾岸戦争では、揃って記者会見を行うさまが連日ニュースで流れるなど、緊密な関係を世界に印象付けた。「互いの言葉を途中で引き取って完結できる」ほどの関係、とパウエルは記している。

両者は、2001年1月に発足したブッシュ長男政権で、チェイニーは副大統領、パウエルは国務長官として再びタッグを組む。

しかし同年9月11日に米中枢部を襲った同時多発テロ以降、次第に立場の相違が増幅し、イラク戦争の戦後処理が長引くにつれて、遂には側近同士も含め、「憎み合う」と評されるまでに関係が悪化した。

元々パウエルは、泥沼化した挙句、結局共産側の勝利に終わったベトナム戦争を現場で経験したこともあり、軍事力行使への慎重姿勢で知られた。

いわゆる「パウエル・ドクトリン」は、米軍投入に当たって満たされるべき条件として、死活的な国益が脅威にさらされているか、明確かつ達成可能な目的が示されているか、あらゆる非軍事的努力が尽くされたか、出口戦略が立てられているか、米国民の十分な支持があるか、国際的支援があるか、などを挙げている。

これら条件がすべて満たされたとして、さらに軍事力行使の前に圧倒的な兵力の一斉投入が確保されねばならない、というのがパウエルの基本姿勢であった。

一方、チェイニーの考えをマンは次のように整理する。

「チェイニーにとっては、軍事行動は、単に特定の敵を制する手段ではなかった。それは

他国に対するメッセージであり、強さの示威でもあった」

特に同時多発テロ以後は、アメリカはあらゆる綺麗ごとを捨てた、と世界に思わせる必要があった。

パウエルは引退後、「あの時点で戦争は必要ではなかった。イラクは何をも、誰をも脅かしていなかった」と語るに至る。

一方、ブッシュが沈黙する中、チェイニーは旧ブッシュ政権を代表する形で、テロとの戦争全般を強く擁護する立場を取った。

2015年にオバマ政権が宥和的なイラン核合意を結んだ際、パウエルはこれを支持し、チェイニーは強く批判した。

2016年の大統領選に当たり、チェイニーは、イラク戦争をめぐる立場の相違がありつつも、トランプ支持を表明した。対してパウエルは、最終的にヒラリー・クリントン支持に回った。

本書を読むと、人間関係が改めて整理できる。

パウエル国務長官と盟友リチャード・アーミテージ国務副長官（両者はともにベトナムで軍人として戦った経験を有する）は、2005年1月のブッシュ政権2期目の発足とほぼ同時に政権を去った。

一方、同年10月、チェイニーの懐刀的存在だったスクーター・リビー副大統領首席補佐官が、CIA職員に関わる情報リーク問題で起訴され、辞任に追い込まれた（本筋の件では無実だったが、手続き問題で有罪とされた）。

翌2006年11月の中間選挙では、与党共和党が上下両院で多数を失った。その直後、詰め腹を切らされる形でチェイニーの盟友ドン・ラムズフェルド国防長官が政権を去る。以後の2年間、チェイニーは孤立したハードライナーとして、苦しい戦いを余儀なくされた。

これは悪いタイミングだった。

同年10月、北朝鮮が最初の核実験を敢行していた。パウエルの後を継いだコンドリーザ・ライス国務長官は、クリストファー・ヒル国務次官補と組んで、金融制裁解除を始めとする対北宥和政策の急坂を転げ落ちていく。

ラムズフェルドの後任の国防長官にはロバート・ゲイツが就いた。マンは次のように書いている。

「ゲイツはライスの親友だった。ブッシュ父政権時、大統領安保副補佐官を務めたゲイツの下でライスは中心的なソ連専門官として働いていた。ブッシュがゲイツを（国防長官に）指名するつもりだと知らせたとき、ライスは興奮し、『喜びを抑えきれなかった』と述べている。チェイニーはもちろんさほど喜ばなかった」

ゲイツ国防長官が、ライス・ヒルの対北宥和政策に待ったを掛けたという記録はない。ラムズフェルドなら、チェイニーを後押しする形で、間違いなく強力に異議を唱えただろう。

イラク問題では状況を見誤ったとチェイニーに批判的なマンだが、ブッシュ政権末期の対北朝鮮政策をめぐるのは、チェイニーが正しかったと述べている。

チェイニーが孤立に陥ったのは、日本にとっても不幸だった。その過程を辿った本書は、苦い後味ながら、多くを考えさせてくれる。